特質につきては別の機會に述べて見たい考へであるが、聖法然の跡を辿りて、時機を叩きて光悅を頌へむとする淨土教徒は、立所の現當を觀照して、おごる懼びを現前不滅の願王にまでさゝげねばならぬことゝ思ふのである。(一一、二、四としこせるあした)

# 勤息僧正を偲びて

前田聽瑞

勤息僧正は明治の淨土宗が產んだ佛教學の權威者であり、また稀れに見る德者でもあつた。もし、明治高僧傳が編まれたら、差詰めその數頁は僧正のために費やされることだらう。

私は不幸にして教壇上の僧正を知らない。昆布茶を飲みながら得意の俱舍論を講ぜられた僧正は一向知らないが、明治四十年の眞夏に私は僧正を傳燈師と仰いで加行にとりかゝつたのであつた。此點から見ると、僧正は實に私に取つて最も思出の多い人である。今その「追悼號」を編むに當つて、一私人としての感慨の念を述べることも敢へて不當ではあるまい。

今から十五年前、加行僧であつた私共は東京は小石川の傳通院の奥座敷で、僧正得

意の講壇である「傳語金諭論」の講席に待つた眞夏の午睡は別に珍らしくもないが、罪業の深い私は、折角の講義を拜聽しながらも時々は居睡りをした。それでも僧正のお聲の凉しさとその講義の御熱心御親切さは今でも判然り浮んで來る。そうして、私は僧正が御遷化になつたその前晩「法輪」誌への「阿彌陀經講話」の筆を走らせてゐた。その時、奇しくも平素は忘れ勝ちである。僧正のことを思ひ出して、「阿彌陀經講話」の中に僧正と私との關係を書き綴つた。その關係とは外ではない。僧正が傳通院の本堂で親しく御授け下さつた宗戒相承の記憶である。金諭論の御講義中に居睡りをした私でも密室道場での御相傳丈けは立派に拜聽した積りである。私は僧正を偲ぶために暫らく其の當時の記憶を辿るであらう。

或る日、傳通院の本尊様の前に白い木綿が一面に布かれた。その白木綿は云ふまでもなく一大蓮華のシンボルである。私共同行五十有餘名のものは、傳宗傳戒の大導師である勤息僧正と親しく膝を交へてこの一大蓮華の上に座した。間もなく同僧正の勸誡が始まつた。そうして僧正は語られた。この場面がツマリ阿彌陀經に所謂諸上善人俱會一處なのだ。この白木綿は白蓮華の印である。極樂の八功德水の中にある白蓮華になぞらへたものだ「露の身はこゝかしこにて消ゆるとも心は同じ花のうてなぞ。」

お互の命はホントに當てにならぬ露の命だ。芋の葉を轉ろげる水玉のそれのやうに明日のほども知れぬ果敢ない私共だ。老衲が先き立ては花のうてなの半ばを殘して待つてゐる程に、各々方も若し先き立たれたならば、どうか花の半座を分けて待つてゐて下さい。各留半坐乘華葉待我闍浮同行人――南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

私共はこんな御說法――熱もあり力もある――を一大白蓮華の上で親しく聽かされた。これが同僧正が私への最初の御說法であつた。そうしてこれが私への最後の御說法でもあつた。こゝまで書き綴つたときに、私はフト浮世の犬が寒む空に吼えてゐる淺間しい聲を聞いた。そうして私の心はズン〳〵と俗世間の事に散つて行つた。定めし、故恩師勤息僧正は彌陀の御淨土からこの小さなミジメな私の姿を眺めて、あはれみもし、またなげいても居られることだらう。

□

故僧正と比較的緣の薄かつた私は餘り多くの感想もなく、又その逸話なども殆んど知らない。從つて、今度その「追悼號」を編むまでは、故僧正に就いて感想を書いたり逸話を書いたりする準備を全然持つてゐなかつた。ところが編輯人の一人としての私は、一つでも故僧正の逸話を多く蒐めねばならぬ立場になつたそこで私は比較的故

僧正をよく知つて居られる方々にその逸話などを聞いてみた。そうして私はヤツトのことで二三の材料を拾ひ集めたから暫らくこれを綴つてみる。

一日、私はまづ六花眞哉氏を尋ねてみた。現在の同氏は大阪の肉山一心寺の方丈樣である。以前は佛教專門學校の教授で、その以前は故僧正の門下生であつた。話は同氏が尙ほ佛教專門學校奉職當時のことである。丁度その時分に「千里眼」といふ透視法(念寫法)が盛んに討究された。一時は東西兩大學の心理學教室はこの話で持ち切りであつた位であつた。從つて新聞にも仲々大袈裟に書き立てられたものである。今は昔、佛教專門學校の教職員室でもこの話が出た。その話の最中に勤息僧正が職員室へはいつて來られた。その時に、同校教授であつた羽田さんといふ文學士の方が、勤息僧正に「千里眼」の話を持ちかけられた。「此頃「千里眼」が盛んに研究されてゐるやうですが、あの「千里眼」は佛教でいふ神通力に似てゐるものでしやうか?」——こう羽田さんが話かけられると、僧正は「一體その千里眼といふのは丸藥ですか」と聞き直されたとのことである。これには羽田さんも二の句が出なかつた。こんな話を六花上人から聞いたが、この話を聞いた丈でも勤息僧正の大體が窺はれやうと思ふ。新聞も讀まずに佛學ばかりに沒頭してゐた勤息上人の面影が、

□

尙ほ茲處に如何にも德者らしい勤息僧正の逸話がある。この逸話の紹介者は石井龍善氏である。同氏は現に佛敎專門學校の幹事さんである。一日この幹事さんは立派な金庫を注文した。その金庫がいよいよ敎職員室の一隅へ運ばれてからのことである。例によつて勤息僧正が出勤された。僧正の眼にとまつたのは隅で光つてゐる金庫である。僧正早速石井幹事をとらまへて「立派な御佛壇が出來ましたネ」とは石井氏も二の句が出なかつたらう。金庫を佛壇と間違へた勤息僧正！こゝにも僧正の人格の一端が見えて嬉しい。

□

私は今一つ僧正の逸話を書き綴りたい。この話を聞かして呉れたのも石井龍善氏である。敎壇上の勤息僧正は倶舍論をやつても選擇集を講義しても何時でも科段を切り、典據となるページを一々指摘して、大論の◉◉丁、安樂集の◉◉丁と親切に敎へたものだそうだ。ところがいよ〳〵試驗の日が來たいつの世にも試驗は學生の禁物だ。名前は聞き洩したが、或る學生が勤息僧正の試驗に、大論の◉◉丁、論註の◉◉丁と出鱈目答案紙に書き列ねたそうだ。學に忠實な僧正は、そのページを學生の出鱈目と

は知らずに一々大論や安樂集を披いて探された。探されても無い筈だ。ところが、そこが勤息僧正だ。新學期が始まると、例の學生をとらまへて「アナタが答案にお書きになつたあの大論といふのはどの大論ですか。一向ページが合ひませんが…」には流石に圖々しい學生も面食つたとの話である。こんな話も今は亡き僧正を偲ぶ種となつたが、何んと云つても故僧正は學者らしい學者であつた。

□

以上、勝手氣儘な感想と聞書とにペンを走らした私は、私の無暗矢鱈なペンに依つて或は故僧正の人格を傷つけはしなかつたかを眞劍心配しゐる。南無阿彌陀佛。

（一九二二、一、二三稿）

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。